

国語科学習指導案

I 日 時	2017年12月5日(火)
クラス	3年C組46名(男子24名 女子22名)
場 所	多目的教室
教 材	漢詩「送元二使安西」(「中学校 国語3」学校図書)
授業者	泉 陽子

II 学習指導案

1. 教材観

盛唐の詩人王維の作であるが、この詩が作られた時期については詳しいことはわからない。この詩は前半で「朝雨」が「輕塵」を「浥」し、「客舎」は「青青」、「柳色」は「新」という別離の場面のさわやかさ、すがすがしい外の景色を強調し、転句・結句で場面を宿舎の中へ一転させ、「西出陽関無故人」と二度と会えないかも知れないと離別の悲しみをうたう。この深い悲しみを抱えてもう一度外の景色へ目を転じたとき、外の景色はどのように映るのか、またそのように美しい景色をうたった王維の心情はいかなるものだったのか。心情と景色の相関関係に注目させることによってこの詩に描かれた世界を考えさせたい。前時まで扱った漢詩は「春望」「静夜思」であるが、まだ漢詩にさほど触れていない生徒たちにとって、「送元二使安西」は詩に描かれた情景や心情をイメージしやすく、漢詩に親しませるのに適切な教材であると考え。

王維は「送元二使安西」のほかにも地方に赴任する官僚への送別の詩を多く残している。それらの詩題には官名が記されているが、「送元二使安西」にはない。これは官僚としての次元ではなく、純粹に個人での次元の関係で別れを悲しんでいることの表れである。別れはお互いの感情を高揚させ、率直なものにする瞬間である。この瞬間に表出された心情とそれをうたった王維について考え、これから生きていく中で経験するであろう「別離」について考える機会にもしたい。

2. 学習目標

- 1 情景を豊かにイメージしながら漢詩を読ませることで、詩にこめられた心情をより確かに理解させる。
- 2 詩形、押韻、対句などの漢詩の読解に必要な基本的な知識を理解させる。
- 3 漢詩を繰り返し音読することで、漢詩のリズムに慣れさせる。

3. 学習計画

- 第一次 杜甫「春望」(五言律詩)を読み、人為と自然の対比を通して作者の心情を考える。対句の働きを知る。(2時間)
- 第二次 李白「静夜思」(五言絶句)を読み、作者の心情を考える。対句の働きを考え、漢詩のリズムに慣れる。(1時間)
- 第三次 王維「送元二使安西」(七言絶句)を読み、うたわれた情景と心情を考える。漢詩のリズムに慣れる。(1時間)【本時】

4. 本時の学習目標

- 1 詩の情景を豊かに想像しながら、王維の別離の悲しみを理解する。
- 2 情景と心情の相関関係を理解し、描かれた世界を深く味わう。
- 3 詩の形式を理解し、詩のリズムに慣れる。

5. 本時の学習指過程

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入	本時の学習目標を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 詩題と作者名を板書し、王維が描いた世界を読んでいくことを伝える。 ・ 王維について説明する。 	行動観察
展開	<ol style="list-style-type: none"> 1 漢詩の読み方に慣れる。 2 詩の場面を把握する。 3 詩の情景を読み取る。 4 王維の心情を読み取る。 5 心情と情景の相関を味わう。 6 王維の友情を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 範読を聞き、読み方の練習をする。 ・ 王維はどこに、なぜいるのかを読み取らせ、人物関係や置かれた状況を把握させる。 ・ 「朝雨」が「輕塵」を「浥」し、「客舎」は「青青」、「柳色」は「新」であることから、さわやかですがすがしい情景をイメージさせる。「新」の役割を考えさせる。 ・ 友人に酒を進める王維の口調を確認する。 ・ 「陽関」を取り上げた意図を考えさせ、王維と元二の秘められた思いに気づかせる。 ・ 王維の心情をふまえて前半の情景は詩全体にどのような効果を生んでいるか考えさせる。 ・ 王維の別離をうたった漢詩の詩題と比較し、元二への深い友情について考えさせる。 	<p>内容をとらえ、情景について考えることができている。</p> <p>内容をとらえ、心情について考えることができている。</p> <p>心情と情景を相関的にとらえようとしている。</p> <p>詩題の特徴を考えようとしている。</p>
終結	本時のまとめと次時の予告を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 漢詩に描かれた世界を振り返る。 	行動観察

実践上の留意点

1. 授業説明

生徒が授業で漢詩に出会うのは今回が初めてである。「春望」「静夜思」を読んだ後、「送元二使安西」を読むこととなった。この漢詩は深い悲しみをたたえながらも、さわやかですがすがしい情景を描く。心情と景色の相関関係に注目させたいと考え、授業を構想した。「安西」の荒涼とした地の果てであるというイメージを押さえた上で、情景を味わうのか、情景を味わってから「安西」へ行くことが持つ意味を考えた上で、もう一度情景を見直すのか。さまざまなやり方があると思うが、今回は後者の方法をとることにした。

2. 研究協議より

・「心情」と「景色」の相関関係を考えるとどのようなことか。

→情景、心情、情景と追うことで、情景の見方がどう変わるかを味わわせたい。

・この詩が漢詩に親しませるのに適切な教材であるという理由は何か。

→情景がイメージしやすく、友情や惜別の情といった心情にも共感しやすい詩である。

・「色」―「新」はどのように押さえようとしたのか。

→「柳」は存在するのに「新」という字が使われていることに気づかせ、「みずみずしい」「新鮮」というイメージを持たせたかった。

・「無故人」から「安西」がどういう所かを想像させれば、心の通った気心の知れた「友」もいない場所へ、仕事とはいえ今生の別れをするという心情を読み深められたのではないか。また、「陽関」「安西」をもっと具体的にイメージさせれば心情の深さにも通じたのではないか。

・効果的な色を考えた時、「青」ともう一つ別の「色」は何か問うてみるとよい。すぐに出ない質問をして考えさせること。三・四句を読んだ後で初句二句に戻ると、変化して見えることに気づかせること。言葉を知れば情景が変わる。情景が変われば世界が変わる。

・生徒に演じさせたとき、どういう気持ちで言ったのか問うてみるとよい。表現されたものと心の中のものとは一致していない。言は意を尽くさず。それを味わわせたい。表出したものは一見軽妙だが、心中は深い悲しみに満たされている。人間はそのような存在。だからこの詩が長く愛されている。

・漢詩のリズムは音のかたまりが意味のかたまりとなっている。詩の基本は律詩である。